

2008 連合群馬平和行動

感想文集



長崎落下中心碑に捧げられた折鶴

平和行動広島親子派遣団

参加者 19名(8家族17名)

2008年5月3日(土)～5日(月)

行程

<平和学習・折り鶴献納> 5月3日(土) 平和記念公園 16:10～18:00

連合群馬の組合員や家族、県民が平和を願い折った千羽鶴を平和記念公園・原爆の子の像に献納。平和記念公園内資料館などを見学。

<平和学習会> 5月4日(日) アステールプラザ 9:30～11:30

語り部 ^{あべ}阿部 ^{しずこ}静子さん 広島県原爆被害者団体協議会会員

1945年(昭和20年)8月6日に投下された原子爆弾により人や建物・街が大きな被害を受けた状況や60年以上経過した今でも大きなつめ跡を残している状況を体験者本人から語っていただき、戦争や原子爆弾の悲惨さや平和について学習。

<親子自由学習> 13:00～

広島親子平和行動に参加して

自動車総連 / 大澤 秀一

今回初めて平和行動に参加し、実際に「原爆ドーム」を見る事が出来ました。

知識としては、広島・長崎の原爆投下の事実は知っていましたし、写真やテレビでもよく目にしていました。

しかし、実際に「原爆ドーム」を目の当たりにして見た時、折れたままの鉄骨や壊れた壁、地面に散乱している瓦礫など、写真やテレビでは伝わってこない生々しさがあり、そこに戦争があって“実際に原爆が投下された”と言う痕跡を感じました。

また、資料館や平和公園内の記念碑など拝見しながら、実際に起こった被爆者の話しなど知り、改めて戦争の悲惨さを実感しました。

最後に、今回の「広島親子平和行動」に親子で参加し、貴重な経験を得る事が出来た事を感謝いたします。ありがとうございました。

大澤 愛美

私は、5月3日から5日の間、初めて広島親子平和行動に参加し、教科書に出る建物などを実際に見ることができて、とても嬉しく思います。

私は歴史が苦手で、テストの点数も、あまりよくありませんが、この原子爆弾については覚えています。だからこの平和行動であの広島
の原爆ドームが見られると言われて、とても興味があり、行くことができ、とても嬉しいです。

でも、実際に見る建物や写真は、悲しく、見
ていて辛い所もありました。

原子爆弾によって、壊れた原爆ドーム、慰霊
碑、原爆の子の像、被爆地を見て苦しかったで
すが、こうした建物があるからこそ、戦争はい
けないと、改めて思いました。

とても良い勉強になりました。



折鶴を手に平和公園へ向かう派遣団一行

広島平和学習会に参加して

電機連合 / 相川 満

今回、はじめて親子平和学習会に参加させていただきました。

原爆ドーム・平和公園での折鶴の献納・平和記念資料館の見学・語り部“阿部 静子さん”による戦争や原爆の悲劇を聴き、平和の大切さを親子で体験できたことは、非常に有意義でありました。

原爆が投下された広島は、今から60年以上昔のことですが、今回広島を訪問し、ビルの立ち並ぶこの街並みからは、本当に原爆が投下されたのかと思うほど、整然と復活し活気ある街であり、戦争の悲劇など想像もつきませんでした。

しかし、平和学習会に参加させていただいたことで、阿部さんからの生の被爆体験を聴

き、平和記念資料館での当時の解けたガラスや瓦など数々の展示物や写真を見て改めて平和の大切さを痛感しました。

そして、親子で戦争や平和について話し合えるよい機会でもありました。

今後も将来の子どもたちのためにも平和の大切さを忘れず、親子の絆を大切にしていって日々の生活を過ごしたいと思いました。

最後に、今回ご一緒させていただきました皆様および事務局の方々には、大変お世話になりました。

相川 未来

はじめて広島へ行って一番すごいなと思ったことは、60年以上まえの戦争で、原爆が落ちたのにもかかわらず残った原爆ドームを見たときでした。そして平和公園で鶴を献納して平和をお祈りしました。

次の日は、阿部さんから原爆体験を聞いたときは、びっくりしました。原爆が落ちた朝8時15分みんなが外で作業しているとき“ピカッ”と光り原爆が落ちたそうです。その後、やけどを負った人たちは、そのまま川に飛び込みなくなったそうです。

阿部さんは、油を塗って傷の手当をしたそうです。なかには傷口がかのうして、虫がわいてきた人もいたそうです。また、やけどをした人は、水を飲ませなかったそうです。なぜなら水を飲むとショック死におちいるからだそうです。この話を聞いてとても怖くなりました。

阿部さんは、このような体験をしたそうですが、すごいと思いました。そして、私から見た阿部さんの話は、わかりやすく原爆の恐ろしさがつたわってきました。

次の日、広島平和記念資料館で、もう一度写真や展示品を見たら、阿部さんの話を思い出して、平和で安心した世界が、一番だと思いました。



原爆の子の像の下に折鶴献納

連合群馬「2008 平和行動 広島親子派遣団」に参加してきました

電機連合 / 鈴木 淳

5月3日から5日の5月連休中に連合群馬が主催した「2008 平和行動 広島親子派遣団」に子どもと二人で参加し広島に行ってきました。参加者は総勢19人、8家族で父と子は3家族、お母さんと子どもが大半の中、少ない父親でした。

子どもには広島を訪問することで戦争の悲惨さ、二度と戦争を繰り返さないことがいかに大切かを理解してもらえればと思い参加しました。

初日は群馬県内の色々な組合の組合員さんたちが折った折鶴を「原爆の子の像」に献納し、平和記念資料館を見学しました。

2日目は被爆体験者の阿部 静子さん(80歳)の体験談を聞きました。阿部さんは18歳の時に爆心地から1.5kmの場所で動員作業中に被爆し右半身に大火傷を負ったそうです。お話では想像できないような人々が苦しんで死んでいく様子を聞いたたびに私は背筋が寒くなり、胃が痛くなり、聞かれている人の中には涙を流されている方もいるほど悲惨な話を

淡々とされ、体験された方の生の声のリアリティさには心の底まで響きました。

また、阿部さんは顔など火傷の跡が残り、指はケロイドにより関節がつぶれて指が引き連れ動かない状態でした。18歳の若い娘さんにとってどんなに辛かったことが想像するだけで胸が痛み、我々のためにつらい体で話に来てくれたことに感謝しました。

その中のお話の中で、世界平和のために何が重要かと言う問の中で「身の回りの平穩、特に家庭の中の平和が世界平和につながる」との事でした。身の回りに争いや憎しみがなければ子どもたちは大人になっても平和な心でいられる、身につまされる思いでした。

皆さんも周りの人に優しくできる気持ちを持ち信頼し合いましょう、そこから世界平和、核兵器の廃絶がかなうと思います。

子どもに感想文を書いてももらったのですが内容を見て同じ様に感銘を受け、我々にとって今回の体験は有意義なものとなりました。

鈴木 萌菜実

私は中学1年のゴールデンウィークに、初めて広島にいきました。誰でも知っているように、広島は世界で初めて原子爆弾が落とされた場所です。もちろん行ったことのない私は、原爆ドームなんて学校の教科書にのっているような写真でしか見たことがありません。

そんな中私は、自分が知らない原爆についてどのくらい勉強できて帰ってこられるだろうかと、期待に胸をふくらませながら、出発の日を心待ちにしていました。

広島に降り立った瞬間は、こんなににぎやかなまちに60年ほど前に、原爆が落とされたのかとってしまうほどに、きれいでした。原爆が落とされた傷痕がまだ残っていたとしても、それを感じさせない、そう思わせない町並みでした。

着いたその日は、折り鶴を原爆の子の像のところに献納し、そして次の日は、被爆体験証言者の阿部静子さんのお話を聞きました。阿部静さんは、爆心地から1.5キロはなれたところで、家の2階で疎開作業をしていて、被爆したそうです。気がついたときには、2階からふきとばされたのか地面に寝ていて、着ていたものは左の脇の下に少しのこっていたくらいだったそうです。

原爆の最も大きな3つの被害は、熱・爆風・火事だそうで、阿部さんが気付いたときは、火事から逃げる人たちが列ができていたそうです。でも、崩れた家のしたじきになって逃げられなかった人や、原爆の熱などでもう死んでしまった人たちを思うと、私は胸がしめつけられるようでした。

こんなことが1度起きていたとしても、その数日後にはまた長崎に原爆が落とされているし、世界から原子爆弾がきえたわけではありません。この世から、原子爆弾が消えてなくなることがない限り、私はこの悲劇がもう一度くりかえされるのではないかと思います。一度にすべての原子爆弾をなくすことはできないとしても、その数を減らすことで原爆で悲しむ人が少なくなると思います。そしていつかは、この世界から原爆がなくなる日がくればよいなと思いました。



爆心地「島外科」を見学

平和の大切さと、平和を守ること

電力総連 / 渋川 由美子

私は、生まれたときから川に縁があった。利根川にほど近い町で生まれ、高校時代、結婚から数年は熊谷市の中央を流れる星川の近くで過ごし、子どもが小学校の頃は、前橋市の中央を流れる広瀬川の近くで過ごした。

小さな頃、父が「昔、利根川が氾濫して、父さんたちは背丈ほどの水につかった。」と話してくれた。高校時代の恩師は「終戦直前、熊谷の空襲で、何人もの人が水を求めて星川で命をおとした。」と教えてくれた。義母は、「終戦直後、前橋の空襲で、何人もの人が水を求めて広瀬川で命をおとした。」と話してくれた。

今は、利根川は雄大に流れ、星川には鯉が放たれ、広瀬川は春は桜、冬はイルミネーションで飾られ、どの川も昔の悲惨な出来事など想像も出来ない。

広島にも想像を絶する悲惨な歴史があった。しかし、私たちが訪れた広島は、暮盤の目のような市街地が形成され、中央を元安川が流れ、緑にあふれていた。

タクシーに乗った際に「きれいな町ですね」と言うと「一度、みんな無くなっちゃたからね」と答えてくれた運転手さんの言葉が胸に刺さった。

60数年前の8月6日、一瞬のうちに広島は焼け野原になった。地獄絵図のような現実を真正面から受け止め、人々は、希望を捨てず、平和を求めて、今のきれいな町を造り上げたのだ。しかし、きれいな町にも、きちんと戦争の悲惨さを伝え続ける何かが残っていた。

私は、アオギリの木に、それを感じた。原爆の爆心地側の半分は焼け焦げ、半分は、生きて生きて生き抜いた、アオギリの木は、心の中に、戦争の悲惨さをしっかりと刻み、平和を願う広島の人々を象徴しているような気がした。

今も世界のどこかで、戦争は繰り返され、尊い命が失われている。人間の命よりも尊いものが、戦争から得られるとは思えない。憎しみからは何も生まれない。大人たちは、気づかなくてはいけない。戦火の中で、キラキラ光る目をした子どもたちが、平和を求めていることを！

そして、今の私や子ども達は、何の不自由もなく、今の平和を当たり前前に受け止め生きている。ただ、この平和は、かけがえのない尊い命と引き換えに、もたらされたものだということを私たちは、忘れてはならない。



元安川沿いの遊歩道を平和学習会へ向かう

渋川 貴一

ぼくが初めて戦争の悲惨さを知ったのは、小学校3年生の時に観た「えっちゃんの戦争」という映画だった。えっちゃんとその友達のたっちゃんは、ハルピンという地で終戦を迎え、終戦後、数年たって、日本へ帰ることができた。数年間、えっちゃんは、あめを売りながら、お母さんを助けた。



平和学習会語り部講師 阿部静子さん

日本へ帰る船の中で、たっちゃん死んでしまい、その体は、むしろでくるまれ、ひもでグルグルまきにされて、海に流された。人でいっぱい船の中で、死体を日本までつれて帰るのは無理だったのだ。

小学校3年生のぼくは、この時、ただ「かわいそう」という感情しかわかなかった事を思い出す。

そして、3年経った中学1年生のぼくは、貴重な体験に恵まれる事になった。平和活動へ参加できる事になった。その時、母は、ぼくに言った。「平和活動を通じて、平和がいかに大切で、平和を守り続けていくために、貴一が出来る事を学んで来て欲しい。」と。

ぼくは、春休みに、広島について調べることと献納する鶴を折る事を約束した。

広島は、第2次世界大戦中の昭和20年8月6日に世界で初めて原子爆弾が投下され、一瞬のうちに街は壊滅した。原子爆弾の被害は、すさまじい熱と爆風とそして放射能で、それまでの爆弾と比べ物にならないくらいの威力だった。その中でも、放射能による被害は、今でも人々を苦しめている事にぼくはおどろいた。

ぼくが春休みに折った鶴は、2歳の時に被爆して10年後に白血病で亡くなった佐々木貞子さんのために同級生たちがつくった慰霊碑に献納するものだった。きれいに折られた鶴でかざられた慰霊碑に「これはぼくらの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和をきづくための」とあった。

ぼくは、ぼくの心の中にもきざみつけた。平和祈念資料館でみた、貞子さんの同級生たちが折ったとっても小さな鶴に、戦後の物が無い中、貞子さんの回復を祈る同級生たちのやさしい心を感じる事が出来た。

平和学習の最後に母が、語り部の阿部先生に聞いた。「平和の大切さ、平和を守り続けていくことを、親が子どもに教えていかななくてはならないと実感しました。今日、ここに参加している子ども達に、先生が望む事がありましたら教えて下さい。」と。

先生は、「家庭や学校で、家族や友達と仲良くする事。身近な人達と仲良く出来なければ平和はあり得ません。身近な人を思いやる事が出来れば、平和になります。そして、小さな失敗を気にせず元気に楽しく生きて下さい。」と話してくれた。

低学年のときに観た映画で戦争の悲惨さを知り、「かわいそう」という感情から「今の平和のありがたさ」の実感へと変わり、「平和を守り続けていくこと」は、家族を大切に、友達と仲良くしていく事だということを学ぶ事が出来たのは、今回の平和活動のおかげだと思う。貴重な体験をありがとうございました。

広島親子派遣団に参加して

情報労連 / 桜井 恭子



語り部の被爆体験を真剣に聴く参加者たち

3日間の平和学習会に参加させていただいて、資料館等の見学をしたり、語り部の方から実際に体験なされた「戦争や原子爆弾の悲劇」について、大変貴重なお話を聞くことができました。60年余り前に起こってしまった、あまりにも恐ろしい出来事のことを。

そして、平和の大切さについて、改めて親子で話し合うことができました。

平和とは、戦争のないこと。友達と仲良く

する、家族で仲良くすることが、平和につながっていくということ。核兵器は、なくさなければいけないということ。

この学習会で得た平和の大切さについて、私たちが多くの方に伝えていかなければいけないのだと痛感いたしました。

桜井 大弥

語り部の、阿部静子さんから、原ばくのこわさについて聞きました。

原ばくは、人がたくさん外に出て働いている時刻、8時15分に、広島島の島病院の上空に落とされました。

ひばくした人は、皮ふがたれ下がったり、ガラスがささってしまった人もいました。

静子さんたちは、痛みを少しでも和らげるために、とても苦しいのに、皮ふがたれ下がった手を、心ぞうより上に上げて歩いたそうです。大やけどをして川にとびこんでいる人もたくさんいたそうです。たくさんの方がなくなりました。

戦争は、二度としてはいけません。そのためには、家族で仲良くすること。友達どうして仲良くすること。思いやりの心を大切にすること。阿部静さんが教えてくれました。

資料館を見学したり、お話を聞いたりして、戦争はとてもおそろしいもの。原ばくは、絶対あってはいけないものだということが、よくわかりました。

ひばくして半分焼けてしまったアオギリの木は、原ばくの翌年、新しい芽をだしました。60年以上たった今も、平和記念公園で元気に育っていました。ぼくが、おとなになったら、また、アオギリの木を見に来たいです。

母とふたりで行った宮島も、帰りが遅くなって疲れてしまったけれど、とても楽しかったです。



戦争を今も伝えるアオギリの木

広島親子派遣団に参加して

情報労連 / 鳥居 恵

5月3日から5日に、連合群馬・平和行動「広島親子派遣団」に中1の娘と参加させて頂きました。

広島では、平和記念公園にて折鶴の献納をし、原爆犠牲者の方々へ冥福を祈りました。

また、原爆ドーム・平和記念資料館では、原爆で被害を受けた当時の写真・遺品を見て、原爆のすさまじさや悲惨さを目の当たりにしました。

二日目は、被爆体験者の「阿部 静子さん」より、原爆投下時の状況のお話を伺いました。お話は、想像を絶するものでした。

三日間の平和学習を通して、戦争の恐ろしさを痛感し、同じ過ちを絶対に繰り返してはいけないと再認識しました。

自分でできる小さな平和活動が何かを考え、行動していきたいと思います。貴重な経験を与えていただき、大変ありがとうございました。

5月3日から5日に母と一緒に広島へ行ってきました。

1日目は、折鶴を献納しに行きました。献納しに行った平和記念公園は平和を祈るための物がたくさんあり、平和への願いがとても強いことが感じられました。

その理由を語っているのは原爆ドームで、その時の被害の恐ろしさがひしひしと心に伝わってきました。

2日目は、原爆体験者の方からお話をうかがいました。その方の話を聞いていると、悲しみや苦しみが感じられ、現在の日本とは思えませんでした。

この体験を通して、昔の日本はもう一度おこしてはならない姿だということがわかり、今の日本はそのような戦争を起こしてはならないという思いを世界に広げる努力をしていることがわかりました。

なので、未来は戦争がなくなっていてほしいと私は思います。

「原爆から60年以上経った今と今後の課題」

情報労連 / 中嶋 照美

今回、親子で戦争や原爆をもっと身近なものに感じるため平和行動に参加させていただきました。

原爆から60年以上経った今も大きな爪あとを残していました。現在も尚、原爆の影響



を受けて苦しんでいる人がたくさんいるそうです。それなのに、世界のどこかで、原子爆弾は作られ戦争は続いています。現在、日本は戦争のない国ですが、今後も戦争が起こらないとも限りません。戦争が世界からなくならない限り私は平和とはいえないものだと思います。今もどこかで戦争に苦しみ、無差別にたくさんの命が奪われています。

当時の様子を語り部の方に、家族を失う苦しみ、全てを失う辛さをリアルに語っていただきました。

目の前に自分を捜す親がいても声が出ず、熱傷による傷と腫れで姿が変わり、わが子でも気付いてもらえない子どもたちもいたそうです。

わが国で戦争がないからこそ、戦争への意識が薄れないように、戦争の恐ろしさを子どもたちに知ってもらいたい、重く受け止めてもらいたいと思いました。

今回、親子で参加させていただき、戦争について親子で話し合うこともできました。子ども自身も戦争について深く受け止めることができ、親子で成長できた平和行動でした。

ありがとうございました。

「広島原爆、現実はずっと怖かった」

中嶋 将汰

最近になって僕は、戦争や原爆について興味を持ち始めた。テレビで「はだしのゲン」や「東京大空襲」を見てからだ。人を殺しあう、爆弾を落としてすんでいる場所を燃やしてしまう。そんな戦いに何の意味があるのかわからない。原爆の被害。一瞬にして命も家も失ってしまう。残された人も地獄のような姿と生活が待っていた。



「皆が仲良くすることが平和を守ることです。」

原爆資料館を見学して写真や、壊れた家の一部、見たことのない形の解けたジュースのビンを見た。とても熱かったのだと思った。被害を受けた人はとても痛かったと思う。本当は見るのも嫌な気持ちになったけど、お母さんに「ちゃんと、見なさい」と言われて見学しながら原爆の恐ろしさを感じていた。

語り部で、今も原爆の被害は続いていることを聞いた。僕は戦争は絶対に起こしてはならない。語り部で阿部さんが僕たちに言っていた「今、自分たちができること、友達や周りの人たちと仲良く平和に。自分の周囲から平和を作ろう。小さな平和を大きな平和へ」と。僕にも平和のためにできることがあることを知った。うれしかった。これから、友達・クラスの皆、学校、少しずつ平和を広げていきたいと思う。

「全部なくなってしまう原爆」

中嶋 啓太

原爆で、お父さんやお母さんを殺されてしまう。そんなのぼくにはがまんできない。



「はだしのゲン」兄弟のような二人

お父さんやお母さんが意味もなく爆弾で殺されちゃうなんて。家も燃えてなくなって、帰るところがなくなった子どもはどうしたのか。

語り部の阿部さんが言っていた。知らない人の家に引き取られたり、そのまま食べるものもなく死んでいたり、原爆のせいで病気になってひとりで死んでしまう子どもが多かったと。

家族の全部をこわしてしまう原爆。戦争がおきたら・・・って考えると、とても怖くなった。テレビで見たことはあるけど、本当にあったことなのだ

って知った。ぼくが住んでいる国では戦争はないけど、地球のどこかで爆弾を作ったり戦争はおこっているって聞いた。早くやめてほしい。いつか全部なくなっちゃう。

広島親子平和行動に参加して

J P 労組 / 齋藤 美緒

今回、連合群馬の広島親子派遣団に参加し、初めて広島の地を訪ねました。

原爆ドームや資料館の見学、そして被爆体験者ご本人の語り、どれも今まで学校の教科書やテレビなどで見たり勉強してきたものですが、実際に自分の目で見たり、お話を聞くことにより、戦争や原爆の恐ろしさが現実のものとして伝わってきました。

資料館の展示物でも中学生くらいの人々の遺品が数多くあり、添えられている説明に、被爆したあと両親が見つけた自宅に連れて帰ったが何日後に死亡とあり、胸がしめつけられました。

本人はもちろん苦しかったと思いますが、何もすべがなく苦しむ我が子をただ見守っていることしかできなかった親のつらさ、無念さも今自分が親の立場で考えると、本当に悲惨な出来事としか言いようがありません。

これから、二度とこんな思いを子ども親も全ての人々が受けることのないよう、私達も伝えていかなければならないと感じました。

齋藤 巧磨

僕は、今年のゴールデンウィークに連合群馬の広島平和活動にお母さんと参加しました。広島では、原爆ドームを見たり、原爆資料館を見学しました。原爆ドームは元の写真と原爆が落ちたあとでは、形がすごく変わってしまって、レンガの壁しか残っていませんでした。資料館には、原爆の熱で変形してしまったガラスビン等がありました。

僕は、ガラスビンの形を見て、想像がつかないくらいにすごい熱だったのだと思いました。

あと、原爆のあとを再現したマネキンがあって、みんな腕を前に出して歩いている姿でした。その理由は体験者の人の話を聞いて分かりました。

みんなやけどなどでいたかったので心ぞうより上に手を上げて歩いていたそうです。

色々なものを見て、原爆はとても怖いものだと思います。そして原爆は、この世にあってはいけない物だと思います。



平和行動 in 沖縄

参加者16名

2008年6月23日(月)～25日(水)

行程

< 2008平和オキナワ集会 > 6月23日(月) 連合本部主催

時 間：15:00～17:00 会 場：那覇市民会館・大ホール

第1部 平和な地球を求めて(若者たちの平和メッセージ・平和への証言・寸劇)

第2部 平和式典

< 戦跡見学 > 6月24日(火) 沖縄戦の歴史とそのつめ跡について学習。

見学先：糸数壕(アブチラガマ)・平和祈念資料館・ひめゆりの塔

< 折り鶴献納 > 連合群馬の組合員や県民が折った鶴を献納。

献納先：平和祈念公園・群馬の塔

< 見学 > 6月25日(水)

沖縄の歴史文化について見学・学習。 見学先：首里城他

「連合平和行動 in 沖縄」に参加して

自動車総連/佐藤 満

私の生まれたところは東北の田舎です。戦後社会が成長を続ける中、金の卵と言われた最後の時代のころ、けっして生活が楽だと言えない暮らしの中で小～中学生をすごし東京に仕事を求めました。

自分たち兄弟を育ててくれた両親は既に居りませんが、戦直後の物資難な状況での生活、物を大事にしろ！といった話はよく聞かされました。

戦闘については地理的に戦場が遠くのためか、悲惨なことは話してくれませんでした。また当時TV番組で人気があった戦争ものドラマも見せてくれませんでした。

このように私の親は多くを語らなかったが徐々に理解できたことは、ひとつは真実なことを知る。そして常に戦争をにくみ平和の尊さを教えてくれていたのだと思っています。

今回糸満市へは二十数年ぶりに来ました、その時是非子ども達と一緒に来て、地上戦のあった現地を見てみたいと思っていました。そして機会ありまして「08年オキナワ集会と戦跡見学」に参加が決まり、自分の平和に対する気持ち(こころ)が当時と今どうなのか？確かめる意味もあり参加しました。

現地に来て強く思うことは戦争がもたらした惨劇、非人間性の実相が体験者あるいはその方々により近い方のことばで学びとれたと思えます。

沖縄は想像を絶する極限状況の中で戦争の不条理と残酷さを身を持って体験されているこの歴史的な教訓を、正しく次世代に伝えなければと新たに誓いました。

集会での高木会長のあいさつでも言われたように、資料館にかかげてあるむすびのことばを全世界の人々が思い悲惨な体験を風化させることなく、後世に正しく平和の心が揺らぐことなく、私はまず身近な家族、そして仲間達へ今回学んだことを伝えつなげて行きたいと思えます。



2008 平和オキナワ集会の様子

「戦争というものは これほど残忍で これほど汚辱にまみれたものはない・・・
いかなる人でも 戦争を肯定し美化することはできない
戦争をおこすのは たしかに 人間です しかしそれ以上に 戦争を許さない
努力のできるのも 私たち 人間ではないでしょうか・・・」

- 展示むすびのことば - より

連合平和行動 in 沖縄に参加して

自動車総連/亀井 松美

今回の平和活動を通じ感じた点を述べさせていただきます。

現地の人から見聞きしたことで、戦争の悲惨さを少しは理解できたような気がします。

沖縄平和祈念公園は、沖縄戦最後の激戦地となった「沖縄戦終焉の地」、糸満市摩文仁(ま

ぶに)の丘陵を南に望み、南東側に美しい海岸線を眺望できる台地にある国定公園です。

この美しい海岸線の岸壁から身を投げてしまった多数の人々の無念さは、はかり知れない思いだったに違いないでしょう。また、玉城村系数にある全長約 270m の病院壕。

当初陸軍壕や住民の避難壕として使用していたそうですが、戦況が激しくなるなか 4 月下旬より病院壕として使用されたようです。

1000 名近くの傷病兵を収容していたという話やひめゆり部隊の惨劇を考えると、なんとも言えない悲しみを感じました。

資料館で実際の手榴弾や爆弾、写真を見てのインパクトは非常に大きいものでありました。

このように自分の肌で感じ取ってきたことで、平和への思いがより一層深まりました、大事なことはこの目で見てきた事、感じ取った戦争の悲惨さをより多くの人へ語り継いでいくこと、そして平和の再認識することのできる重要な活動だったのではないかと思います。



美しい海岸線には無数の悲劇が...

平和行動「in 沖縄」に参加して

電機連合 / 三佐藤 紀三夫



犠牲者の名前が刻まれた平和の礎

沖縄と言えば、珊瑚に囲まれた純白な砂浜と真っ青な綺麗な海を想う。日本の南端につらなる沖縄の珊瑚礁の島々は、63 年前の太平洋戦争において、日本本土を防衛する防波堤となり、その島々は西太平洋における航空基地として、不沈母艦の役割を担わされた。今は、マリリゾート地として世界的にも有名な沖縄であるが、一般住民を含め 20 万の人々が命を落とした本土唯一の地上の戦地であり、最後の日米決戦になったところでもある。

そんな悲惨な戦争の廃止と平和への願いを込め、我々連合の仲間は、沖縄へ集結、平和行動へ参加したのである。

ひめゆりの塔では、軍とともに最後まで行動した女子高生による看護部隊の活躍を展示したひめゆり平和祈念資料館を見学した。激戦の中、多くの生徒が若くして砲弾や自決によって倒れ、犠牲になった資料を見て、本当に戦争の悲惨さ、無念さが伝わり、目頭が熱くなるのを感じた。また、ひめゆりの塔周辺の民家集落には空き地になっているところが幾つもあり、一家全員が亡くなり、子孫が途絶えた事も聞かされた。

また、そのひめゆり学徒が配属された、陸軍病院の分室となった、「アブチラガマ」も見学した。ガマとは、自然に出来た洞窟であり、「アブチラガマ」は、もともと集落住民が戦場からの避難個所として使用していたガマであった。米軍の上陸とともに追い込まれた日本軍隊が占領し、陸軍病院として使用したとの事である。全長 270m の壕内では、2 階建ての病室と 1000 人以上の負傷兵を抱え激戦に耐えた場所である。

ただの洞穴であると思いながら中に入り、説明案内を聞くとおぼろげにその悲惨な光景が見え、靈感も何も無い自分であるが、奥の暗闇から誰かが観ている気配を感じた。また、出口付近では火炎放射器や大砲で破壊された落石のキズ跡が残っており、戦争当時そのままを追体験する事ができた。

平和祈念公園にある「平和の礎」には、この戦争で犠牲になった、米軍人 12000 人、日本軍人 94000 人、沖縄住民 94000 人の約 20 万人の氏名が刻まれている。

御霊を慰めるとともに、悲惨な戦争を風化させることないようにしたい。平和を享受できる幸せと平和の尊さを再確認した沖縄であった。

平和行動「in 沖縄」に参加して

電機連合 / 丸山 智文

“平和行動”へ参加させていただき、あらためて戦争の悲惨さを痛感した。年月が経過してもその傷跡は沖縄の人々の心の中に大きな影を残していて、明るい南国のリゾート地である沖縄のイメージとは裏腹に悲しい出来事が実際に起こってしまったことの無念さを痛切に感じた。

今回の沖縄平和行動学習のために「平和記念公園・資料館」「ひめゆりの塔」「糸数アブチラガマ」を見学させていただき、多くの一般住民が犠牲になり多くの悲しい出来事が実際に起こってしまった。耳を覆いたくなるような出来事が戦火の中あちらこちらで行なわれ、自分の家族をお互いに殺しあったり、自分の子供を自分の手で殺めてしまったりと、想像を絶し言葉もでないようなことが行なわれてきたと聞き、その方たちの無念さを思うと戦争は2度とあってはいけない。

戦争が終わりあとに残るものは、憎しみと悲しさのみです。戦争の無意味さをみんなでしっかり考えて、次世代に語り継いでいくことが今の私たちがやっていくことではない

でしょうか。また、やっていかななくてはならない使命だと感じます。世界では自分の思想のためや人種の違いだけで戦争を勃発させている地域があります。そんな時代だからこそ世界にも目を向けて、命の尊さを訴えていかななくてはならないと思います。昨今の世間では、簡単に人を傷つけたり、自分で自分の命を絶ったりする事件が大変多く、その記事を目にするたび、戦争で亡くなられた多くの「生きたくてもどうにもならなかった」人たちの無念さを思い出さずにいられません。多くの「いまを生きている人」に命の尊さをわかってほしいと感じます。

最後に、今回貴重な体験をさせていただき大変ありがとうございました。自分なりにこれからの人生で何が出来るのか考えて、自分なりの「平和行動」をおこし「命の尊さ」を訴えていこうと思います。



平和記念公園 群馬の塔へ折り鶴献納

2008年度 平和行動 I N沖縄に参加して

電機連合 / 渡辺 進

2回目の平和行動として沖縄に参加させていただきました。今回、私にとっての沖縄は初めての経験でもあり印象としてはとても暑く海の綺麗なリゾート地を連想しておりました。

しかし、実際に戦争の悲惨な出来事や住民の深い悲しみ、苦しみを肌で感じた3日間によって、沖縄のイメージがガラリと変わりました。この平和集会に参加して現在と過去の事実を目の当りにし改めて戦争の悲惨さや残酷さを実感することが出来ました。また、講演



群馬県出身の戦没者慰霊の塔

のなかでの語りでは、自決の強要や我が子を手にかねなければならなかったと言う悲惨さ、そして住民たちの気持ちとはどれ程のものであったのか、私には想像することが出来ませんでした。戦争で生き残った人々が自らの悲惨な体験を語り、戦争のない平和な世界を作る為に、われわれ戦争を知らない世代が受け継いで行く事の大切さを知り、平和の尊さをあらためて感じました。

また、アブチラガマ・ひめゆりの塔などの見学を含め、3日間を通し見聞きしたことでは貴重な体験をさせていただいたことに対し感謝いたします。

平和行動「in 沖縄」に参加して

電機連合 / 大川 真司

平和行動 in 沖縄に参加をさせていただき、梅雨が明けたばかりの沖縄の地に初めておりたちました。沖縄の夏は暑い！ことは覚悟していましたが、自分が想像していた以上の暑さで、肌を射すような日差しが照りつけ、痛みを感じるほどでした。

そんな中「平和記念公園・平和資料館」「ひめゆりの塔」「糸数壕」を見学し、ガイドさんから沖縄戦で起こった悲惨な出来事を聞き、暑さを忘れ、自分がこの時代にいたらどうしていただろうと考えさせられました。「自分の子供の命すら守ることができない世界」があったことに、悲しみと怒りの入り混じった複雑な気持ちになり、今の平和な時代に生きていることがどんなに幸せなことか痛感しました。特に糸数壕（アブチラガマ）では、懐中電灯がなければ歩けないほどの真っ暗闇の洞穴でしたが、こんな地下の暗闇の中で死体などの異臭に耐えながら生きていくことを余儀なくされていた人たちがいたのだと思うと、悲しくなりました。実は洞穴の中で懐中電灯が壊れてしまい、他の人の明かりを頼りに歩いていたのですが、本当に大変でした。

こんな悲惨な出来事を繰り返さないために、自分の家族だけでなく多くの人に語り継いでいかなければならないと思いました。

連合群馬 「2008年平和行動 in 沖縄」に参加して

電機連合 / 金井 智子

私は、連合群馬「2008年平和行動 in 沖縄」の一員として、63回目の「慰霊の日」である6月23日に合わせて沖縄の地に立った。恥ずかしいことに「慰霊の日」が沖縄県民にとってこんなに大切な日であることを初めて知った。若者による「平和メッセージ」、そして「平和への証言」を聴き、胸がジーンときた。



アブチラガマ入壕前の説明を聞いて

2日目は平和学習として、戦没者慰霊碑参拝とアブチラガマへ行った。戦争の悲惨さがモノクロの写真として数多く展示。また戦争状況がモノクロ映像で放映されていた。切なさでいっぱいになった。

平和を壊すのも人間。平和を守るのも人間。「二度と戦争は起こしてはいけない」と改めて感じた。「戦争の記憶」はこれから先もずっと正しく語り継いでいかななくてはならないのだと。

今回の「平和行動 in 沖縄」は私にとって貴重な経験となり、「沖縄」への思いが大きく変わった。平和への願いを込めて一日一日を大切に生きていこう。

2008年連合平和行動 in 沖縄

J P 労組 / 田村 泰之

今回初めて連合の平和行動に参加させていただいて、貴重な体験等をする事ができました。

なかでも一番印象に残っているのは、系数壕での見学です。壕の入り口付近からだんだんと空気も変わり、涼しくなっていくのを感じました。中は真っ暗で、灯りがなくては前に進むのは、とても困難なところでした。灯りがあっても足もととはとてもすべりやすく慎重に歩かなければ危険な場所でした。

壕を案内して下さったガイドさんの話では、系数壕は戦時中軍の病院として使用されたらしく、ただ、薬品等もそれほどなく、悲惨な状態だったみたいです。系数壕を撤退するときは自決を強いられたそうです。

平和行動へ参加させていただき、平和について深く考えたのは初めてでした。今回の沖縄での体験を活かし平和についてより一層考えていきたいと思っています。



アブチラガマへ

2008年連合平和行動 in 沖縄

J P 労組 / 中村 崇裕

今回の沖縄平和活動は、とても印象的なものになりました。

私は、何年か前に長崎の原爆関係の資料館に行ったこともあり、沖縄の資料館も同じくらしい印象でした。ただ、「アブチラガマ」という鍾乳洞だけは、資料館に飾ってある資料館とは違い、中の様子は当時とは色々と変わってしまっていました。そこにはその当時の人々の思いや苦しみなど様々なたくさんのものが当時のまま残っている気がしました。

なによりも、戦争について少し甘い考えを持っていた自分がその場に居てはいけない気がしました。常に嫌な空気が肌に伝わり、ほんの数十分いただけですぐにでも外に出たいと思いました。当時は外にいるよりもそこが1番落ち着ける場所だったかと思うとゾッとします。本当に今、戦争が日本で起きてなくて良かったと思える瞬間でした。

それもこれも、当時の人達の頑張りや、戦争という間違いを繰り返させないように今にまで伝えてきてくれた人達のおかげだと思ひ感謝の気持ちでいっぱいです。

私も、これからはそういった人達のようにこれから先の私のように戦争を体験した事のない人に過去の間違いを起こしてはいけない、間違いを繰り返してはいけない、というのを1人にでも多くの人に伝えていけたら良いと思いました。

2008年連合平和行動 in 沖縄

情報労連 / 佐藤 一博

恒例の2008平和オキナワ集会へ参加し、沖縄から広島・長崎へ、そして根室へと、平和ピースリレーが引き継がれ実施されていく最初の行動であり、集会で平和アピールを採択したが、6月23日は沖縄全土で喪に服す特別な日とし、沖縄戦の悲惨な、歴史的事実を正しく受け止め語り継ぐ重要性・風化させない行動を知り驚ろかされました。

今回、戦跡コースで、平和祈念公園・群馬の塔へ折り鶴を献納し、平和の礎では日本全国から徴兵され戦没された人々の出身県と名前、沖縄島民の名前が記された碑が建立されており、心からご冥福を祈った。

また、学徒での「ひめゆりの塔」は有名であります。沖縄全土に数々の学徒隊の塔が建立されていることを改めて知ることができた。

自然壕「アブチラガマ」洞窟体験で、案内人の親はいまだに戦争の事を一切語ろうとしないとの事、また、戦争の悲惨さ、酷さを後世に残そうと、体験の証言を勇気をもって語り継ぐ勇気と、苦しみがあることも改めて知ることができましたし、洞窟内での悲惨な生活や負傷兵の治療に専念したことを聴き、身震いが起きました。更に、戦争という悲劇を二度と起こさないことを再認識し、出口の慰霊塔に対し、歴史的事実を風化させない行動と平和の重要性・意識高揚に取り組んでいくことを誓った。

熱い沖縄の平和行動、有意義な行動であった。



ひめゆりの塔を参拝

2008 連合平和行動 in 沖縄 派遣団に参加して

情報労連 / 小森 哲哉

1 日目は連合本部主催 2008 平和オキナワ集会に参加し、全国より約 1,600 名の仲間が出席し、「若者たちの平和メッセージ」の朗読や慶良間諸島に米軍が上陸し集団自決もあったという体験者の声をまとめた絵本を拝聴しました。

2 日目は平和祈念公園内群馬の塔にて、多くの組合員による平和への願いがこめられた折り鶴を献納し、資料館ではじっくり見られないほどの凄まじい地上戦の様子や体験が展示してありました。

ひめゆり平和祈念資料館では、ひめゆり学徒隊の病院壕のジオラマや元ひめゆり学徒隊生存者の証言本も展示され、修学旅行の女子高生が涙を流しながら証言本を読んでいる姿は今でも忘れられません。

系数アブチラガマでは、ガイドさんと一緒に壕に入り重症患者が増え野戦病院になり、ひめゆり学徒隊が麻酔なしの手術など悲惨な環境と多数の死者が安置されていた場所の説明では体が震え、実相を伝えて頂きました。

今回沖縄で感じたことは、平和行動の派遣団だからこそ現地のガイドさんも熱心に説明し、話したくないことも案内されたと思います。一番大切な家族同士が殺し合う集団自決の惨劇は信じられないほどのショックを受け、あらためて戦争の愚かさ、平和運動の大切さを深く感じる事が出来ました。



語り部による証言を聞く

2008 年連合平和行動 in 沖縄

安中地協 / 峯岸 一

私は、平和行動 in 沖縄に初めて参加させていただきました。数年前、根室に参加した経験はありますが、平和行動に参加するたびに複雑な思いと平和への尊さを認識させられます。

特に、ここ沖縄は唯一、一般住民を巻き込んだ地上戦が行われた場所であり、集会や戦跡を訪れるごとに、如何に戦争が非情であったかの思いを強く感じました。オキナワ集会に於ける平和への証言では語り部の知念さんから、慶良間諸島の集団自決の話聞き、親が子の命を絶ち、親も自らの命を絶つ、集団死を強いられる悲劇を聞き壮絶な状況を痛感しました。更に南部戦線の戦場となった戦跡を訪れ、軍とともに最後まで行動し、多くの生徒が砲弾に倒れ、あるいは自決を余儀なくされた「ひめゆり学徒隊」の悲劇や日本軍の陸軍病院として使われた系数アブチラガマにおける悲惨な状況を肌で感じる事ができ二度と繰り返してはならない思いがこみ上がってきました。この平和行動を振り返り、これだけ多くの一般住民を巻き込んだ組織的な地上戦が実際に起こり、その悲惨な爪痕は沖縄県民や日本国民に大きな代償を突きつけた出来事と重く受け止めました。戦後 63 年を経過する時代ですが、今回の貴重な体験を、わたしの身近な人たちへ語り継ぎ平和への尊さを改めて大切にしていきたいです。

平和行動 in 広島

参加者14名

2008年8月4日(月)～6日(水)

行程

<核兵器廃絶 2008 平和ヒロシマ大会> 8月4日(月)

連合・原水禁・核禁会議3団体主催。

時間：16:45～18:53 会場：広島県立総合体育館

内容：折鶴献納、主催者・来賓挨拶、イベント、平和アピール、
合唱「原爆許すまじ」

<ピースセミナー> 8月5日(火)

時間：9:30～11:00 会場：メルパルク広島「平成の間」

内容：第1会場のセミナーに参加。テーマ「平和の語り部・被爆体験の証言」

<ピースウォーク>

時間：13:00～16:00 会場：原爆ドーム・平和記念公園

内容：連合広島青年・女性委員会のガイドによる平和公園内の原爆慰霊碑巡り。

<平和祈念式典> 8月6日(水)

時間：8:00～ 会場：広島市平和記念公園

内容：広島市主催の式典に参列。

連合 「2008 平和行動 in 広島」に参加して

自動車総連 / 多田 明雄

8月4日から6日に開催された、連合「2008 平和行動 in 広島」に参加しました。

私は広島に行くのは2回目です。その1回目は小学校の修学旅行で、もう25年前のことになるが、その時は最初に原爆資料館を見学した。当時は改装前の資料館だったが、その印象は強烈であった。今でも鮮明に記憶しているが、熱線で溶けた人の爪や死亡直前の被爆者の写真など、当時の私にとっては「恐怖」でしかなかった。

夜の旅館でもそのイメージが残り、怖くてなかなか眠れなかったことを覚えている。厳島神社も見学したが、ほとんど覚えていない。原爆の悲惨さは、私にとってそれほど強烈な印象であった。

このたび平和行動に参加することとなり、当時の思い出がよみがえり、正直「いやだなあ」と思った。しかし、今回は参加する意義も違えば、私自身の置かれている境遇も違う。当時は小学生だったが今は家庭を持ち、子どももいる。もちろん労働組合役員として、世界平和のために、様々な行動をしていく必要があることも認識している。改めて今、現実に触れて思いを新たにしていけることが必要だと考え、参加することとした。

平和ヒロシマ大会や、平和祈念式典は、参加人数も多く、悲惨さを感じるという点では少し身近ではなかったように感じる。しかし、ピースセミナーの一つひとつの説明や、連合広島の青年部の皆さんの説明を聞いて、被爆当時の地獄のようなありさま、核兵器の恐ろしさが改めて認識できた。

たった一発の爆弾、しかもまだ未熟な実験段階だったと言える原子爆弾で、これだけ多くの人が苦しみ、死んでいったことを考えると、今世界中にある核兵器を使うということが、いったいどんなことになるのか。兵器自体の性能が凶悪化し、1発で百万人以上の人間を殺せる核兵器が数千発もあるという。また、爆弾が出す放射線の威力で、建物や武器は破壊せず人間だけを殺す、悪魔のような爆弾も大量に存在するという。想像するだけでも恐ろしい、SFや映画の世界で描かれるような『地球の終わり』が、具体的な現実となってしまうと感じる。

太平洋戦争が終わって60年以上が過ぎ、広島は多くの人で賑わっていた。しかし、今回の平和行動で見聞きしたのは、まさしく『地獄』の体験の痕でもあった。この恐怖の兵器を、もう二度と使ってはならない、この悲惨な体験を、もうだれにも味わわせてはならない、そういう思いを新たにすることができた。そしてこの思いは、私たち日本人が、全世界の人々にしっかり語り継いでいく必要があると感じた。

最後に、産別を越えた多くの仲間の皆さんとの語らいも、私の素晴らしい思い出となりました。心から感謝申し上げます。



2008 平和ヒロシマ大会の様子



挨拶する高木会長

「2008 連合平和行動 in 広島」に参加して

自動車総連 / 春山 仁

連合の平和行動に参加させてもらうのは今回の広島が初めてでした。これまでは、学校の授業で勉強したことや、マスコミ報道などで戦争のことを見聞きしたことはありましたが、現実を目の当たりにすることは初めてのことでした。今回の広島への参加で改めて戦争の恐ろしさを認識しました。



広島に原爆が投下されてからすでに63年の月日が流れており、現在の広島の街並みを眺めるととても想像ができません。また、今もなお進化する核開発や核実験、紛争が行われている現実、恐怖を感じることも怒りが込み上げてきます。

ピースセミナーでは、被爆体験者から話を聞かせてもらいましたが、「参加者の方々に心から感じてもらいたい」との話が印象的で、その後、資料館の見学において色々な物を見て触って感じてきました。

被爆者の平均年齢が75歳を超えたとの話で、直接後世に語り継ぐには限界が近いかも知れません。その様な中で、3団体（連合・原水禁・核禁会議）による様々な活動が進められており、私たちにできることや私たちがやらなければいけないことなど色々と考えさせられる平和行動となりました。

最後に、今回の平和行動の場を提供してくださった連合の方々、また、一緒に団行動をして頂いた皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

2008年連合平和行動 in 広島に参加して

自動車総連 / 近田 秀敏

2008年連合平和行動 in 広島に初めて参加させていただきました。

広島は8月といえば、毎年被爆者をはじめ数多くの人々が参列し行われる平和記念式典は、遠い地で行われている式典、また、昭和20年8月6日に一発の原子爆弾により、市街地の建物が一瞬のうちに倒壊し、十数万人のかけがえのない命が一瞬のうちに奪われたことも、60数年前の悲惨な出来事という認識でしたが、原爆資料館に一步足を踏み入ると、63年前の広島の悲惨な現実、被爆前の写真、悲惨な被爆写真、折れ曲った鉄、溶けたガラス瓶など、高熱と、爆風で一瞬にして廃墟になった様子が展示されているのを見て、言葉を失いました。

また、今なお被爆者たちは後遺症に苦しめられていると聞き、私の戦争、原爆に対する知識、平和に対する意識の薄さを痛感した。

今回、平和行動に参加し、自分の目で・耳で戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさを感じることができ、今の私に何が出来るか考えさせられた平和行動でした。

近いうちに、家族を連れて行きたいと思います。

広島平和行動レポート

自動車総連 / 細田 康次

広島平和行動では、なかなか経験出来ない、素晴らしい経験をさせて頂き、大変有難うございました。今後の組合活動や、仕事に出来る限り生かして行きたいと思います。

私は、広島は2度目ですが、初めて広島に行った時は観光でしたので、詳しい所までは解りませんでした。今回、参加させて頂き、被爆者の体験談や平和記念公園での説明を聞かせて頂き、戦争の怖さ、核兵器の恐ろしさを改めて知りました。

核爆弾投下で被爆され全身に大火傷を負った写真を見ると、火傷の痛みや怖さが蘇る様です。

実は、私も右足全体に大火傷の傷が有り、(自業自得の怪我ですが)右足切断寸前までの怪我をし、約一年の入院生活をしました。

原爆投下後の広島では、満足な手当ても出来ず苦しみながら死を迎えた人も多くいると思いますが、戦争を繰り返してはならないと痛感しました。

現在でも、戦争を繰り返している国が有りますが、宇宙から見れば点でしかない地球上の人間が仲良く幸せに暮らせる日を望みます。

今回参加させて頂き、各産別の人達と交流させて頂き、短い時間ではありましたが、大変勉強になり、また、お世話になりました。今後も、この様な研修に組合役員がより多く参加出来るような企画をして頂ければ、と思います。



解説を聞きながら戦跡を巡るピースウォーク

2008 連合群馬平和行動に参加して

電機連合 / 松尾 元

広島の平和祈念式典にでるのは、二度目になりますが、今回の連合群馬の平和行動は、より深い活動になるように、ピースウォークや講演会など、事前の活動が、大変充実していて、より深く、平和の意味を強く感じました。

日ごろは、日常の出来事追われがちで、あまり考えないことを、いい機会だったと感じます。

一緒に行った他産別の方も、日頃交流があまりないので、非常にいい経験ができ、今後の活動に生かして行きたいと思います。

2008 連合群馬平和行動に参加して

電機連合 / 丹羽 伸一

この度 連合群馬派遣 2008 連合平和行動 in 広島に初めて参加させて頂きました。8月4・5・6日の2泊3日で、朝から晩まで大変内容の濃い3日間でしたが今回この体験を受けて改めて記念式典の重要さを再認識致しました。

セミナー、講演会、ピースウォークと本当に貴重な体験をさせて頂いた事に大変感謝しております。

ありがとうございました。

2008 連合群馬平和行動に参加して

電機連合 / 長田 浩一

平和記念式典に参加するのは、今回で2回目となりました。

初めて参加したときは、在籍支部の行事の一環として参加し、その際は、各自が記念公園内を散策し式典に参加しただけでした。

今回、実際に被爆された方の講演会、そしてボランティアの方々の説明を受けながらのピースウォークと、改めて原爆の恐ろしさを身にしみて感じました。

遠方ということで、毎年に参加はできませんが、一度は家族全員で参加できたらと思っています。

広島平和行動に参加して

UIゼンセン同盟 / 山田 裕司



爆心地を見学

8月6日、今日も朝から風も無く蒸し暑い日である。ここ広島は63年前の今日、午前8時15分に1発の原子爆弾が投下された。

原子爆弾は市街地の上空約600メートルで目もくらむ閃光を放って炸裂し、爆心地から2キロメートルにおよぶ市街地の建物が跡形もなく壊され焼きつくされ、爆風や熱線などによって多くの人々が亡くなりました。(昭和20年末までに約14万人の尊い命が失われた。)かろうじて生き残った

人々も焼けこげて血みどろになったボロボロの衣服をわずかに身にまとい、瓦礫の街を逃げまどったとのこと。

今年の慰霊碑には五千三百二名の被爆者の名簿が奉納され、広島原爆死没者は二十五万八千三百十名になった。戦後63年経つが、街並みは様変わりをして、住み良くなっていますが、今もあの戦争の痛みを持ち続けている人々がいることを忘れてはいけません。

原爆ドームや動員学徒慰霊塔、原爆の子の像、平和祈念資料館を見学して回りました。そこには、悲惨な事実として多くの人々の尊い命が奪われたことや、決して人類は二度とこのようなことを繰り返してはいけないと訴えているようでした。

被爆地を体験することは、色々な面で自分自身を見直すことが出来ました。もし原爆が投下された時代に、ここ広島に生きていたら、自分はどうなっていたのだろうか。家族を守って生きて行けるのだろうか。黒く焼け焦げた人々を目のあたりで体験したらどうなっているのだろうかと多くの不安を感じました。

平和の語り部として被爆体験者の木下光太さんのお話を聞いて来ました。木下さんは満4歳の時に被爆の体験をされ、祖母、伯母、従兄弟の3人を亡くしたそうです。当時の状況を詳しく私達に話してくれました。印象に残ったことは、「アメリカ人を憎んではない。原爆を投下したことは憎んでいる」と語ったことです。

被爆者の平均年齢は75歳を越えたようです。体験者の話を直接聞けることがあと何年出来るのでしょうか。もはや日本の75%が戦後時代になっています。被爆証言者の悲惨な叫びを、戦争を知らない世代にどう伝えるかが今後の課題だと思いました。

「八月六日は何の日」と聞かれて答えられない若者、「アメリカと戦争した」ことすら知らない若者達が多くなってきている時代、私達は、忘れてはならない原爆の記憶や核兵器に対する怒りを強く持つべきだと思いました。

核兵器がなくなること、世界中に平和な日が来ることを願いたい。また今回体験したことを職場の人達に伝えたい。



平和への願いが込められた折り鶴を献納

2008 連合平和活動 in 広島に参加して

電力総連 / 桑子英樹

新幹線で到着した広島の街は大きく、また、とても暑いところでした。駅前には路面電車があり、最新式のものや趣のある旧式の列車が次々到着しては客を乗せて発車していきます。広い通りにたくさんのデパートやビルが立つ町並みは、63年前には廃墟であったことなど想像することもできないくらい立派なものでした。

8月4日夕刻、核兵器廃絶2008平和ヒロシマ大会に参加しました。国内外各地から多くの参加者が集まり、折り鶴献納、黙祷をしました。被爆者から体験談を聞き、改めて戦争の悲惨さ、虚しさを感じ、全員で核兵器の無い平和な世界にすることを誓い合いました。

翌5日、被爆者である木谷光太さんの講演を聞き、戦争によって家族や財産を奪われた無念の思い、今なお後遺症に悩まされている大勢の人々がいることを教えていただきました。午後は原爆ドーム・平和祈念公園を連合広島の役員の方々に案内していただきました。初めて見る原爆ドームは63年前の惨状を現在に伝える貴重な建物であると同時に、あのような過ちを再び犯してはならないというメッセージを全世界に発信していると感じました。原爆慰霊碑に仲間と折った鶴を供え、平和への思いを新たにいたしました。

6日の朝、平和祈念式典に参加しました。核兵器の無い平和な世界を造る取り組みを全世界に語りかける式典には、要人、観光客も含め世界各国から多くの人々が参加していました。広島・長崎からのメッセージが世界の人々の心に届くことを参加者の一人として願わずにはいられませんでした。

この活動に参加して平和の尊さ、毎日の生活が何事もなく送れることの幸せを知ることができました。例年のない暑さ（広島市民談）と連日猛暑の中での開催でありましたが、引率スタッフのおかげで無事に過ごせたことを感謝して報告いたします。

2008 平和行動 in 広島に参加して

基幹労連 / 木村 譲

2008年8月6日（水）午前8時ヒロシマの空はいつものように晴れわたり、空には灼熱の太陽、蝉たちはけたたましく鳴いている。こんな中『原爆死没者慰霊式』が開始された。

63年前の忌まわしい記憶が広島の人々にはまた蘇ったのであろう。言葉では言い表せない悲惨な状況を原爆資料館の展示物や原爆体験者の話を聞いて、思いはかることしか私たちには出来ない。

核兵器廃絶 2008 平和ヒロシマ大会では、主催者代表挨拶や来賓の挨拶もあったが、深く印象に残ったのは、「広島ジュニア・マリンバアンサンブル」のかわいい子どもたちの演奏とその代表者が「音楽は世界共通の言葉である。私たちは音楽を通して世界の人たちと仲良くしたい。そして、この世の中から戦争を無くしたい」と言う言葉でした。

まさにその通りだと思います、武器を持って戦うことが平和を作るではありません。世界の人々と心と心を通じ合わせることでそれが世界平和に繋がるのではないのでしょうか。

ピースウォークでは、現地の慰霊碑や供養塔を案内していただいたが、どの場所でも犠牲になった人々に対する思いを感じることができ、戦争の愚かしさを痛感せずにはいられませんでした。



子どもたちによるマリンバ演奏

2008 連合群馬平和行動 in 広島に参加して

運輸労連 / 小倉 武敏

「はだしのゲン」や「黒い雨」など悲惨な原爆投下関係の本を読み、いつか広島に行き、この目で見てみたいとの思いがあった。いつか、いつかというものはなかなか難しく、これまで訪れる事がなく居たのだが本当によい機会に恵まれたものだと軽い気分で参加をした。が、実際そこには直視できないほどの現実と歴史があった。記憶から忘れ去りたい出

来事を「被爆者としての使命」と言う語り部の方の話や、様々な思いで建立された慰霊碑などたいへん興味深いものだったし、広島平和記念館の原爆被害にあった実物の展示は、言葉にできないほどのすさまじいものだった。

日本は唯一の被爆国として核廃絶を訴えてきた。しかし戦後 63 年もの時間が経過して、原爆投下について政治家までが「しょうがない」などという時代になった。本当にこのままでよいのだろうか。

当時、原爆ドームを残すか、取り壊すかについては意見が分かれたという。壮絶な被害を一刻も早く忘れ去り復興したいという考え方も理解できないわけではないが、現存させてこの被害を後世に残していくという決断をしたことには、頭が下がる思いである。それに応えていくということでも、世界中の人に見てもらいそして考えてもらいたいと思う。



原爆ドームをじっと見つめる参加者

秋葉・広島市長の平和宣言の冒頭の言葉、「こんな思いはもう誰にもさせない」ためにいったいどうすればよいのか、また「核兵器は廃絶されることだけに意味がある」という真理の重みについての答えは既にあるはずである。対人地雷の禁止条約などがそうであるように、核廃絶もいつかきっと実現するだろう。しかしその猶予はない。一日でも早く実現するためにも日本はもっと声を大きく世界に訴えていくことが必要だろう。特に本年 9 月に初めて日本で開催される G8 下院議長会議から、開催地広島だからできる「平和」が世界中に広まってゆくことを期待せずにはいられない。

これからも、愚かな人間が同じ過ちを繰り返さぬように、連合平和行動が続いていくようにしていかなければならないし、機会があれば是非また参加させていただきたいと思う。

連合平和行動 in 広島

J P 労組 / 須永 一志

今回、平和行動で広島へ行き、様々な体験をさせていただきました。

ピースウォークで原爆ドームを訪れ、原爆ドームは学校の教科書などでもよく載っている建物でしたが、崩れた建物のレンガやドームの天井部分などをよく見ると粉々だったり、鉄骨部分が骨だけになっており、とても原爆の威力の凄まじさ、恐ろしさを感じました。

2 歳のときに被爆し、12 歳で急性白血病で亡くなった佐々木貞子さんは人の人生としてあまりに短く悲しくて仕方がございません。ですが、彼女が折り始めた折り鶴が平和を祈る象徴として世界の人々にも広がり、各地から折り鶴がささげられるのは素晴らしいことだと思いました。

原爆被害者の木谷さんの話を聞かせていただき、今でも原爆の放射能を浴びて体に異常を訴えている人がいることを知り、とてもかわいそうに感じました。また、戦争がなく平和に日々を過ごせることの素晴らしさを感じました。

今の平和があるのも、この尊い方々が犠牲になってしまったことも頭に入れてこれからは平和の大切さ、平和の喜びをかみしめて生きていこうと思いました。

「2008平和行動 in 広島」に参加して

連合群馬青年委員会 / 高橋 弘光



犠牲者の霊に平和を誓う

今から63年前、人類の歴史上最悪の兵器、いや兵器と呼ぶのすら生ぬるい様な物が広島・長崎に投下されました。核爆弾。人類史上最悪の兵器は戦争を終わらせる事には成功しましたが、それ以上の被害をもたらしました。投下直後の言葉に表せないほどの惨劇、そして、63年経った今なお、核の被害に苦しんでいる人々、そしてこれほどの被害をもたらす兵器は今もなお作られ続け、今この瞬間にもボタン一つ、ほんのわずかな指の動き一つで、使用されようとしています。

私は平和行動に2回目の参加となりますが、戦争の悲惨さ、核の恐ろしさは前回参加した時と何ら変わらずにありました。核被災者の話を聞き、当時の悲惨さや恐怖、明日も見えないような日々、思い出したくもない過去、しかし絶対に忘れてはならない過去、被災者の方がどのような思いで語っていたのか、私はその思いをどの程度

わかっていたのか、それすらわからなかったと思います。

平和記念公園を巡り、戦争当時、原爆落下当時の様々な物を見ました。原爆のすさまじさを今なお物語る原爆ドーム、原爆により亡くなった方の慰霊碑、必死の思いで生徒を守ろうとした女性教師の銅像。どれもが戦争を体験した事が無い、戦争を知らない私にとっては想像もつかない様な事だったと思います。

広島平和記念資料館にも足を運びました。前回も見学しましたが、改めて原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、悲しさを痛感し、戦争は何も産まない、悲しみ、憎しみをいわずらに増大させる物だと感じました。

平和祈念式典では広島市長が平和宣言を読み上げ、世界に平和を訴えていました。もう二度と原爆を使ってはならない、もう二度と広島・長崎の様な惨劇を繰り返してはならない、そう思わずにいられませんでした。

そんな中、私は一つの物に目を引かれました。被爆したアオギリです。このアオギリは被爆し、枝も全て折れ、幹も黒こげになったと聞きました。今もその傷跡は残っていますが、現在もたくましく、青々とした葉を茂らせています。この木が広島の方達にとって大きな励みになっています。そしてこのアオギリの二世が育っています。このアオギリ二世は全国の学校に配られ、元気に育っているそうです。

戦争は悲惨で、残酷で、悲しい事です。世界中の人々がそれを本当に理解すれば戦争は無くなるのではないかと思います。もう二度と核を戦争に使ってはならないと心から思います。これからも広島・長崎が世界平和の中心となり訴え続けて欲しいと思います。もう二度と核が戦争で使われないように、広島・長崎を繰り返さないように。

平和行動 in 長崎

参加者 11名

2008年8月7日(木)～9日(土)

行程

<核兵器廃絶2008平和ナガサキ大会> 8月7日(木)

連合・原水禁・核禁会議3団体主催

時間：14:00～18:00 会場：長崎県立総合体育館・メインアリーナ

内容：主催者・来賓挨拶、高校生平和大使、構成詩、平和アピール、
合唱「原爆許すまじ」

<折り鶴献納> 8月8日(金) 連合群馬の組合員や県民が折った鶴を献納。

時間：9:30～10:30 場所：長崎市平和公園内

<ピースウォーク>

時間：9:30～11:30 会場：原爆落下中心地公園

連合長崎青年・女性委員会のガイドによる原爆慰霊碑巡り

<平和シンポジウムin長崎> 連合・原水禁・核禁会議3団体主催。

時間：14:00～16:00 会場：原爆資料館大ホール

内容：被爆者援護施策の充実・強化に向けて

「2008 連合平和行動 in 長崎」

電機連合/丸山 智文

今回、初めて長崎の平和行動に参加させていただき、原爆の恐ろしさを目のあたりにしました。一瞬にしてへ平和な風景が地獄絵図になってしまう原爆、「人間はなんという恐ろしいものを見つけてしまったのか」と考えさせられます。今回の行動ルートの初めに「核兵器廃絶 2008 平和ナガサキ大会」に参加。当日は夏の日差しで大変な暑さ、しかし、原爆を投下されてしまった「あの時」は、くらべものにならない熱さが人々を襲い「尊い命」を奪ってしまい、人間は無力だと感じてしまいました。



2008 平和ナガサキ大会の様子

しかし、「核兵器廃絶 2008 平和ナガサキ大会」会場内で当日の高校生平和大使の「微力だけど無力じゃない」という言葉が私の考えを一変させました。

「人間は無力じゃない」無力ではいけないことの重要性を彼ら彼女らに教えていただきました。

また、翌日には原爆落下中心地公園、平和公園で各所の説明を聞き、「原爆（核）」の恐ろしさに衝撃を覚えたのがわすれられません。その後原爆資料館へと移動し、貴重な資料を見聞きしました。そこに展示されていたレプリカの原爆模型を見たとき、恐ろしさと悲しさを感じたのは鮮明に目に焼き付いています。

今回、大変貴重な体験が出来たことを皆さんに感謝しています。これから、我々が住む日本で過去に起こってしまった原爆被害について、ありのままを次世代の人たちに伝えて、「同じ過ちは繰り返してはならない」ことを自分なりの平和行動として行こうと思います。

「2008 連合平和行動 in 長崎」

電機連合/佐藤 和子

8月7日～9日まで、2008 連合平和行動 in 長崎に参加させていただきました。

7日に 2008 平和ナガサキ大会に参加しました。会場の周りでは、高校生たちが署名や募金活動を行っていました。はじめは高校生がずいぶんいるな—とっていました。

大会が始まり高校生がたくさんいたのは高校生平和大使というのがあることを知りました。

この高校生平和大使の活動として【高校生1万人署名活動】をはじめとしさまざまな活動をしているとのことでした。

私たち戦争を知らない世代がこれから、どうこの悲惨な出来事を伝えていったら良いの



高校生平和大使の活動報告

か考えなければならないなと思いました。また、被爆者2世・3世がいると聞きました。いろいろな後遺症もあると思うので、政府にももう一度これからのあり方を考えてほしいと思いました。

2日目はピースウオークに参加し、平和公園ないを歩きました。

原爆資料館の見学を行いました。私は広島と長崎は同じ原爆が落とされたと思っていました。でも違ったのです資料館を見学して初めて知りました。広島でウラン・長崎でプルトニウム大きさも違うものでした。

『2008 平和行動 in 長崎』に参加して

電機連合/机 正夫

私は、8月7日から9日の3日間『2008 平和行動 in 長崎』に連合群馬の一員として参加してきました。長崎は2回目になりますが、原爆落下中心地周辺を見学するのは初めてでした。

初めに「核兵器廃絶 2008 平和ナガサキ大会」に参加しました。会場入口では、高校生達が核兵器の廃絶と平和な世界の実現をめざす「高校生1万人署名活動」と国連に派遣する「高校生平和大使」の派遣カンパの活動を行っていました。戦争を知らない高校生達が国連に対し、活動は「微力だけど無力じゃない」を合言葉に核兵器廃絶を訴え続けています。私達も核兵器が無くなるまで平和行動を続けていかなければならないと感じました。

また、大会の中で、構成詩「親子で綴る平和の願い」で、親子が一緒に世界恒久平和・核兵器廃絶を詩と朗読(被爆体験)を一つの物語にしたのを見て、被爆体験者が少なくなっている現在、家族で戦争の話をして、戦争があったことを風化させないことが大切だと思いました。

次に、原爆落下中心地や平和記念公園・原爆資料館に行き、皆さん達が折った鶴を献納してきました。ここには、戦争を二度と繰り返さないと願った建造物や原子爆弾の威力と恐ろしさを知ることが出来ました。

今回の平和行動で見たこと・聞いたことを家族・職場の仲間一人でも多く戦争の恐ろしさを伝えていきたい。



2008 連合平和行動 in 長崎

電力総連/高林 靖

初めての長崎県なので、前日の夜からわくわくしていました。

1日目は、核兵器廃絶2008 平和ナガサキ大会で、ホテルから路面電車で移動し、県立総合体育館へ向かいました。入口付近では、高校生による募金、一万人署名活動が行わ

れていましたので、募金して署名しました。高校生平和大使報告・決意では、高校生の熱い思いが、心に響きました。



高校生による署名活動に署名

同じ長崎県でも、佐世保市と長崎市とでは、原爆の認知度が違うことを聞いて、ビックリしました。群馬の私たちは、もっと低い認識だと痛感しました。原爆は落下程度の認識しかなかったのですが、爆発と同時に発生した火球は、瞬間、摂氏数百万度に達し、体積を急速に膨張させた後、多くの市民の命を巻き込みながら、約10秒後にはその光輝を失いました。

爆発時の超高熱により発生した想像を絶する爆風と熱線が、付近の建物と人を襲い、都市を跡形もなく消失させてし

まうまで、3秒足らずの出来事でした。あっという間に生命が奪われたと思いました。戦争終結のために原爆投下もあったと思いますが、アメリカが、人体に影響をどれくらい及ぶのか実験で投下された部分もあるのだと思いました。

現代では、原爆投下は考えられませんが、もし投下されたら大勢の生命が奪われることでしょう！夕方には大会も終了となり、夕飯を兼ねて、ホテル近くの飲食店で交流会を実施しました。他労組の方の名前や所属、今回の派遣の思いが知れて良かったです。

2日目は、ピースウォークで平和公園内に折り鶴を献納しました。この日の外気温は、とても高く少し歩くだけでも、汗がたくさん出てきました。爆心公園の北側に、高さ10mほどの三角形の標柱があり、63年前に、この標柱の上空500m付近で原爆が炸裂したと思うとゾッとしました。ウォークしながら、各ポイントでお話をしていただき、過去の背景が目に浮かんでくる思いでした。

昼食休憩後に、原爆資料館を見学しました。等身大のファットマンや、やけどの写真、壊れた眼鏡等が見られ、改めて恐ろしさを感じました。その後には、シンポジウム in 長崎に参加しました。特に印象に残っているのが、被爆体験者の訴えと被爆二世の訴えでした。被爆者の現状や、裁判の進め方を知れました。

案外、国は冷たいと思いました。厚生労働省は、ガン検診は認めない。認めると、遺伝子異常を認めることになるなど、辛い体験をされている人達のこととは考えていない、むしろどうでもいいんじゃないかという態度にも感じ取れます。原爆で苦しんでいる被爆者の気持ちが、少し解ったように思えます。今回の派遣で、体験したことを、職場のみんな、知人友人、家族に話して、情報を共用出来ればと思います。2泊3日の派遣を体験させていただき、ありがとうございました。



ピースガイドの説明を聞く参加者

連合「平和行動 in 長崎」に参加して

電力総連 / 井田 勇一

今回の「平和行動 in 長崎」に参加させていただいて印象に残ったことは、高校生達の活動と、国の原爆症認定基準に対する矛盾でした。高校生達の活動というのは、「高校生平和大使」と「高校生一万人署名活動」の事で、そういった活動がある事を全く知らなかった自分は、興味を持ち、話を聞き、少し恥ずかしく思いました。なぜなら、全国の高校生達が核兵器の廃絶を目指し、自分たちの力で署名活動を行い、国連などに訪問しているというのです。しかも、その活動は10年間も行われ、今も続き、卒業生たちは世界各国でも活動を行っているというから驚きでした。自分はただTVなどから情報を得るだけで、何も知らなかった事を思い知らされました。「ビリョクだけどもリョクじゃない」彼らの言葉がとても心に残り、「何かしなければ。自分にも何か出来るのでは。」という思いになりました。

それと、国の原爆症に関する認定は、とても被爆者の方を思い制定されているとは思いませんでした。被爆者の方に対しては当然なのですが、一言に被爆者といっても被爆二世の方や、在外被爆者の方だっているのです。そういった方々への配慮が欠けているように思えてなりませんでした。国が勝手に行った戦争、とまでは言うつもりはありませんが、その戦争で被害にあわれた方々へ対し、支援を行うのはごく自然で当たり前のような気がしてなりません。1度でも放射能を浴び傷ついた遺伝子は、ずっと傷ついたらまだと聞きました。そうすると、二世だけではなく、三世、四世と続く事になり、そういった方々が放射能の影響で病気になり苦しんでいても、支援が完全に行われたいのは絶対に間違いだと思います。

国の原爆症認定への判断は、これからも申し入れなどが行われ、最終的にはすべての人達が、納得できる結果になると信じていますが、その時が一刻も早く来ればと思いました。

今回の平和行動に関して、自分ではそれなりに知識を持って参加させていただいたつもりでしたが、ほとんど知らない事ばかりで、いろいろな事を考え、学べる研修となりました。これからもいろいろな事を学び、また機会があったら、平和行動に参加させていただきたいと思いました。



折り鶴献納（原爆落下中心碑）

2008 連合群馬平和行動 in 長崎

情報労連 / 細野 勝浩

2年前の2006 沖縄ピースステージ、昨年は2007 連合群馬平和行動 in 沖縄と、2年連続で沖縄の平和行動に参加し、長崎の平和行動は今年が初めての参加となりました。

沖縄での悲惨な戦争の出来事としては、日本で唯一地上戦が繰り広げられた場所に対し、長崎ではプルトニウム原子爆弾により、一瞬にして7万4千人の尊い命が奪われてしまった場所であると言う事でした。

しかしながら、現在の長崎市の街並みを眺めてみると、63年前の悲惨な出来事の面影は、原爆落下中心地や平和公園周辺にあるモニュメントや、原爆資料館にある残存物の数々を見て、その悲惨さを痛感する事が出来ますが、本当に原子爆弾が落とされ、町中が瓦礫と化したとは思えないくらい、活気に満ち溢れた歴史的な素晴らしい街並みであると思いました。

その街中を平和活動の最終日である8月9日(土)の11時頃、最後の市内視察を終えて長崎駅へ向かい一人で歩いていました。待ち合わせ時間を気にしながら歩いていると、街の雑音が消える様なサイレンが鳴り響いていました。ふと思いを切り替えると、街の至る所で今まで歩いていた市民の人々が、その場で立ち止まり黙祷をしていました。一瞬、時間が止まったかの様に錯覚をするほどの思いに、私もサイレンが止むまでその場で黙祷をしました。「ながさきは忘れない。あの日の悲惨な出来事を・・・」。2008長崎大会で合唱した歌詞を思い出しました。

長崎市民ひとり一人の心の中には決して忘れる事の出来ない、63年前の8月9日11時02分がある事を痛感しました。そして、私も忘れない長崎市民の思いを。



折り鶴献納(平和公園内)

2008 連合平和行動 in 長崎に参加して

基幹労連 / 坂井 邦彦



パネルに見入る参加者

2年前、出張の合間に、長崎の市内見物をした。大浦天主堂・長崎平和公園・浦上天主堂など。その時は「見物」にすぎなかったのだということを知られた。今回の平和行動で思い知らされた。

長崎平和公園では、「平和について考えるだけではだめです。行動しなければ。」という被爆一世の方の肉声が心に響いた。爆心地地下断層や、原爆資料館の遺物の数々。ここには普通の生活が無残に切り取られてしまった人々の思いがこもっていた。

息子は小学6年生の修学旅行で広島に行き、平和記念資料館の展示物にショックを受けて帰ってきた。修学旅行の前に、家族で東松山の丸木美術館に原爆の図を見たりして心の準備をしてから行ったのに、本物の生き

た証しに圧倒されてしまったようだ。

今、私はようやくあの時の息子の気持ちがわかる気がした。それは、われわれ人間の持つ破壊力の大きさ、破壊され尽くした大地からの復活の力だ。

日本は唯一の被爆国と言われ、われわれ日本人は被害者なのだと思っていたものが、実際には強制移住をさせてきた韓国その他の在外被爆者を生み出した加害者であったことがわかったことも親子共通の衝撃であった。

今から35年ぐらい前、ラジオの深夜放送で被爆2世の女性(18歳ぐらいの方だったように記憶している)の投書が反響を呼んだことがあった。中学生の時に原爆症を宣告され、余命いくばくと言われ、将来アナウンサーになりたいという夢もあきらめたというものだった。今回の長崎行はそういう話を親子で話しあうきっかけにもなった。



2008 平和シンポジウムの様子

ドレイクの方程式というものがある。

われわれと通信(コンタクト)できる文明をもった宇宙人がどのくらい存在するのかを推定するもので、こういう式だ。

$$N = R^* \times fp \times nex \times fl \times fi \times fc \times L$$

Nはそのような地球外文明の数で、R*以下、惑星の数等、種々の数値を想定する思考実験式だ。

ここで、最後のLは星間通信を行うような文明の推定存続期間を示している。高校の時に見た番組「コスモス」の中で、ホスト役の天文学者故カール・セーガンはこのLの値が核戦争を引き起こすかどうかで大きくもなり小さくもなることを訴えていた。

ドレイクが1961年にこの式を提唱したとき、彼が想定したLの値は10000年だった。われわれの文明が電波を通信手段として使い出してから100年余り。ドレイクの推定値の1%をようやく越えたばかりでもう文明の危機を迎えてしまっている。今、「世界終末時計」は終末の5分前だそうだ。

われわれは現在20000発以上の核兵器を保有し、過去にすんでのところ核戦争の危機を回避した例はドキュメント番組がよく伝えるところである。

私はこの思いを身近な誰かに話したい。

その輪が広がって行って欲しい。

そうしてこの惑星の歴史が途絶えないようにしてもらいたい。

連合群馬平和行動 in 長崎に参加して

太田地協 / 山岸 稔

連合群馬の平和行動は3年前の沖縄に続き、二回目の参加をさせていただきました。

前回の沖縄平和行動では、改めて戦争の悲惨さを知りました。特に「米軍の捕虜になる位なら死んだほうがまし」という日本軍の教えの下に最愛の我が子や家族の首を切ったり、崖から飛び降り自殺したという事は、私には悲痛の極みでした。

長崎では一発の原子爆弾で一瞬にして7万人の尊い命が失われた。また、爆心地から近い熱線（爆心地の中心は4000度、1km離れても1800度）を浴びた重傷者は、表皮はただれてズルズルとはがれ落ち、皮下の組織や骨までが露出していたという。そして無傷であっても放射能を浴びた人達は、時の経過と共に様々な症状を引き起こした。さらには被爆者二世、三世までが放射線被害に苦しんでいる。

63年前、沖縄は地上戦、広島と長崎は原子爆弾落下と絶対に有ってはならないことが起きたのは事実です。原爆落下から10年後に広島で第1回原水爆禁止世界大会が開催されたが、50年以上経過した今日でも核兵器は廃絶されるどころか世界には約3万器が保有されていると言われていています。今、もし核兵器が使われたら 国がというよりは地球の壊滅になるのでしょうか。私たちは、恒久平和を願うだけでなく、具体的に行動しなければなりません。大きなことをやろうと力む必要は無いと思います。署名、カンパ、選挙等々、あたり前のことをあたり前にやるということを徹底していきたい。



浦上天主堂の前にて

「2008 平和行動 in 長崎」に参加して

富岡地協 / 山添 智

平和活動 in 長崎に参加して感じたことが2つある。

一つ目は、「忘れてはいけないことがある」

戦後60年以上の年月が経ても、戦争があったこと、終戦の間際に7万人以上の犠牲者を出した原子爆弾による悲惨な被爆、そして今日でも後遺症に悩む人がいて、さらにその影響は2世以降にもおよぶことがあることを。



平和の音を奏でる長崎の鐘

二つ目は「後世に伝えなければならないことがある」

世界中と言いたいが、まずは私のように戦後の昭和生まれの者に、そして私の子供のような平成生まれの者に、核兵器の悲惨さ、平和の尊さを伝えていかなければならないことを。

特に二つ目は、伝えていく為にはきちんとした仕掛けが必要であり、連合の仲間によるこの平和活動が極めて有意義な施策で、今後も一人でも多くの仲間に、長崎を始めとする各地の平和活動に参加をしてもらい、そこで得られた思いをそれぞれの帰った先で伝える活動として継続すべきと強く感じた。

最後に、今回私は長崎の町の中で、原爆投下のその時を迎えた。町の動きは止まり、長崎の多くの人達が黙禱をささげている姿が強く印象に残り、核兵器、戦争のない平和の尊さを再認識できたよき夏であった。

平和行動 in 根室

参加者 11名

2008年9月19日(金)～22日(月)

行程

< 北方四島学習会 > 9月20日(土)

時間：14:00 受付開始 ～ 17:00 終了

会場：北海道立「北方四島交流センター」(略称：ニ・ホ・ロ)

内容：第1セミナー「ふるさと北方四島への思い」
第2セミナー「北方四島の今を知ろう」
第3セミナー「北方四島ビザなし訪問報告」
第4セミナー「野生動物の楽園、北方四島」
第5セミナー「ロシア風水餃子“ペリメニ”づくり」

< 2008平和ノサップ集会 > 9月21日(日)

時間：11:00～12:00 会場：納沙布・望郷の岬公園

内容：主催者・地元・来賓挨拶、元島民の訴え、平和メッセージ、
平和リレー、集会アピール採択、がんばろう三唱

< 2008平和ノサップ集会「根室うまいもん祭り」 >

時間：12:00～14:00

会場：納沙布・望郷の岬公園

根室市、根室市観光協会、根室市内4(落石、根室、根室湾中部、歯舞)
漁業協同組合の協力による食の祭り

2008 連合平和行動 in 根室に参加して

電機連合 / 松澤 千代子

今回初めて平和行動に参加して、沖縄や、広島、長崎に比べてなじみが無いと言うか自分自身知識が無かったのですが、改めて北方領土についての問題を再認識させられました。

普通に暮らして居た島民にある日突然現れたソ連軍により、強制的に追い出されてから半世紀以上、その時の島民はもう70代半ばになっていること、何故ここまでかかってしまったのでしょうか？国と国の領土争いに巻き込まれているのは弱い島民です。

北海道の最北東に位置する4つの島、根室に向かう町並みは、「返せ、北方領土」の看板があちらこちらに見られ、海の向こうにははっきりと見える島は近くにあるのに、自由に行



2008 平和ノサップ集会の様子

けない島、元島民の方達はどんな思いで、この島を毎日眺めて暮らしてきたかを思うと胸が痛くなる思いです。

16年前から始まったビザなし交流では、回を重ねるごとにロシア人と日本人の交流が互いの認識や理解が築きつつあることは、素晴らしいことであると思います。今現に生活している人は仲良く、混在で助け合いながら暮らせたらいいのにと想いつつ、過去の領土問題と互いの認識の隔たりがここまでの長い年月がたっているのでしょうかね。二・ホ・ロ集会で受けた研修のなかで、「動物達(鳥)には国境が無い」

という言葉が頭に残っています。

今問題になっている自然破壊、北方領土にとどまらず、一人一人が真剣に取り組まなければならないことだと痛感しました。この平和行動に参加出来たことに感謝します。

2008 連合平和行動 in 根室に参加して

電力総連 / 堀口 宏幸

今回、2008連合 平和行動 in 根室に参加させていただき、ありがとうございました。「日常当たり前で過ごしている」ということの有り難さを改めて感じる事ができました。

私は、2年前にも平和行動 in 根室に参加しており、その時は、カニ獲り漁船が銃撃拿捕された事件から約1ヶ月後という中での学習会でした。緊張感が漂う中、開催されたことが、今も印象に残っております。

今回の学習会では、北方四島の現状と、野生動物の宝庫である四島の今後について学びました。

ビザなし交流に一定の評価はあるものの、ロシア経済の好調から、日本の高度成長期なみの開発が進められていることに愕然としました。2年前とは、全く違った北方四島の写真を目の当たりにし、一刻も早い解決を図らなければならないと実感させられました。



集会参加者

自然環境保護の観点からも、国際社会全体の問題であると思います。国や私たち国民は

「北方領土は日本固有の領土であることと、決して北海道だけの問題では無い」ということをもっと認識・表現し、1日も早く返還が実現するよう努力していかねばならないということを実感しました。

最後に、今回の平和活動に参加させて頂きまして本当にありがとうございました。

2008 連合「平和行動 in 根室」に参加して

情報労連 / 小島 学

2008 年の平和行動の締めくくりとなる「平和行動 in 根室」に参加させていただきました。

参加する前に認識は、新聞は報道番組等で見聞きするだけでしたので、歯舞群島、色丹、国後、択捉の北方四島の領土問題は国の外交課題の一つであり、国が解決すると思っていました。

平和行動に参加し、北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）で聴講したセミナーで、旧ソ連の不法占拠から63年が経過し、元島民の高年齢化も進む中で、「私達にはもう時間が無い、故郷を思い海を眺めれば、すぐそこに島が見えるのです。」一日でも早い四島一括返還を望む悲痛な叫びに、胸が痛くなる思いになりました。

翌日の北方領土返還運動原点の地である納沙布岬・「望郷の岬公園」で3.7km先の貝殻島を前にした「2008 平和ノサップ集会」でも返還に向けた切実な願いが伝わってきました。

今回の平和行動で学習したことを、知人、友人、家族に伝え、北方領土問題に関心を持ち早期返還実現に向け私達がどのように取り組んでいくか、考えて協力していきたいと思っています。



全国から集まった参加者

2008 連合平和行動に参加して

情報労連 / 熊川 美津男



拳を高々と返還コール！

北方領土問題については、マスコミや会社の署名等で聞いたり見たりはしていたが詳しくは知らなかった。

今回平和行動に参加し、北方領土返還要求運動について少し理解できました。特に北方四島交流センターでの「北方領土を知ろう」という話の中でロシア政府は四島のインフラ整備等を実施し「自慢できる島」へと発展させている。このことは島民を含めた四

島返還への対応を難しくしている。そんな中でも、ビザなし交流の継続及び戦前からの日本建築を保存する運動に取り組むことが重要だ。

それには、「皆さんには四島返還という病気にかかって周りの仲間うつして欲しい」という言葉が大変印象に残っています。

2008年連合平和活動 IN 根室

J P 労組 / 清水 和夫

大トロ、サーモン、いくら、花咲蟹、さんま、ジンギスカン、生キャラメル・・・と北海道の名物を堪能してきました。ここだけ読むとグルメ紀行みたいですが実際は連合平和活動 IN 根室に参加させていただきました。

今回、参加させていただいたことで「北方領土問題」を深く考えるきっかけになりました。恥ずかしいことですが、今までの北方領土に対する自分のイメージは、日本人が皆追い出されたことで人間が一人もいなくなり、手付かずの綺麗な自然、無人島でした。しかし、元島民の方にお話を聞き、今の北方領土の現状を聞いたことで、大きく認識が変わりました。



北方領土返還要求に署名

昔は、ウクライナ系のロシア人が故郷の混乱のため移住してきたこと。この島で生まれてきている2世が増えていること。島の生活が少しずつ豊かになっていること。条件がありますが、ビザ無し渡航ができ交流があること。元島民の平均年齢が高くなっていること。ただ歴史を学び、報道を見聞きしているだけでは得られないことを学ぶことができました。

故郷を奪われた日本人がいること。

北方領土を故郷とするロシア人がいること。

元島民が故郷を奪われたように北方領土を故郷とするロシア人の故郷を奪うことになるかもしれないこと。

このことを忘れず、それでも「北方領土はわが国固有の領土」と返還を訴えていきたいです。

『2008連合平和行動 in 根室』に参加して

J E C 連合 / 大林 努

これまで、北方領土問題については「日本の領土がロシアによって占拠されている」といった程度の認識しかなく、あまり関心がありませんでした。報道等では周辺の海洋資源について採り上げられることが多く、それらを見ても大きな問題として捉えることができなかったからです。正直なところ、他人事のように考えていたのも事実です。

今回、この平和行動に参加し、元島民の方々のお話を聞いたことで、この問題がとても大きな問題であるということを知りました。生まれ育った故郷は誰にとっても特別な場所です。その場所が目と鼻の先にあるのに、帰りたくても帰れないとしたら... そう考えただけで、胸が苦しくなりました。高齢になられた元島民の方々の「故郷への想い」は言葉では表せないほど大きなものだと思います。

ここ数年、ロシアによる島々の整備が進み、今後、返還はますます厳しい状況になるかと思っています。そのような中で、今、私たちにできることは、この想いを共有し、返還を訴え続けることだと思います。まずは、以前の私と同じように北方領土問題に関心を持っていない人たちに、この平和行動で得られたことを伝えていきたいと思っています。

『2008 連合平和行動 in 根室』に参加して

前橋地協 / 田中 彰

今回、根室における平和行動に参加し、北方四島に関する知識が、あまりにも乏しいのに痛感させられました。

9月20日の北方四島学習会では、まず第2セミナー「北方四島の今を知ろう」に参加し、第二次世界大戦後の旧ソ連軍による四島占領により、約17,000人の日本人居住者の強制送還から始まり、その後の旧ソ連時代の行政状況が解説され、特にソビエト連邦崩壊後の島民の生活は、満足に物資が入ってこない状況が続いていたということでした。

そんな中、ビザなし交流が1992年から始まり、1994年の北海道東方沖地震では、大変な被害に遭われたのですが、日本政府は島に対し、医療や食料の人道支援を行ったことを聞き、外交政策の必要性を感じました。

3年前から、こここのところの原油高を受け、島が急速に発展していく状況が説明され、セミナーは終了しました。

次に第4セミナー「浸食される島々～本格化する四島開発」に参加し、ロシア政府の巨額予算による大規模開発プロジェクトと、大企業の島独占状態における自然破壊や、密漁、乱獲などの政治的問題などが解説されました。

これらの問題に対し、歴史的経緯や外交などの政治力学だけでは決して解決する問題ではないことを痛感しました。

9月21日の納沙布岬の集会には、1,200人の組合員が集まりました。この機会をきっかけに、ひとり1人が考え、1人でも多くの人と問題意識を共有していくことが、北方領土問題の解決に繋がっていくのではないかと、考えさせられました。



北方四島交流センター内の展示

平和行動 in 根室 感想文

太田地協 / 高山 勝章

私は北方領土返還を掲げながら現在北方領土に在住するロシア人との北方四島交流事業を進める事に対して理解に苦しみました。しかし、この集会に参加し、この事業が北方四島の帰属の問題の解決に向けて両国は努力するという日露両国政府の共通の認識と合意に基づいて実施されていることを知り、返還へ向けた取り組みの一環として大変大切な事業だと認識した事と、この事業に深い思いを持って取り組んでいる方々の心も理解でき、この事業の重要性も認識しました。

また、北方領土元住居者の方々の故郷に対する思いや北方領土の価値観を感じる事が出来た事も現地でのセミナーによる直接的な活動の賜物だと思います。

一方で、現状は四島在住ロシア人の領土問題に対する歴史的経緯の認識については、日本とまだ隔たりがあり、解決に向けた兆しを実感するまでには至りませんでした。

全国の北方領土元住居者や返還運動関係者も年々高齢化してきている事から、我々に出来る事は、連合を通じてこういった運動に参画し少しでも多くの人々に語り継ぐ事で多くの人々が理解を深め、国民の力によって一日も早い北方四島の一括返還に繋げていく事だと思います。



納沙布岬より四島を望む